

繋の必要を感じ、今年度から愛知県知立市の知立小学校の情緒障害児学級に可能な限り、参加し、自閉児の学校教育上の問題を直接に感ずるように努力し、細かな問題を担任教師と検討していく活動を実践してきた。また、何回かその自閉児達の家族と夕刻遅くまで話し合ったりして、単に遊戯治療室での自閉児、大学で考える自閉児教育ではなく、現場の中で、また家族とともに考える中で、真の研究活動を求めて実践してきた。こうした活動の一環として、7月にはこの学級の「山の学習」にも参加し、自閉児と共に「カミキリムシ」や「クワガタムシ」を取ったり、一晩中、一睡もせず扇風機を眺めている自閉児と汗みどろになって取組んだことは、私にとっては貴重な体験であった。

一年間にまとめることのできた成果は、つぎのとおり

である。

1. 「適応と精神健康」 シリーズ現代心理学第3巻  
幼児・児童の心理 久世敏雄・小嶋秀夫編  
福村出版 昭和51年11月
2. 「留年・浪人現象」 シリーズ現代心理学第4巻  
青年の心理 久世敏雄編 福村出版  
昭和52年5月
3. 「子どもの心理治療—遊戯療法—」 心理学ゼミ  
ナール 鈴木達也編 福村出版 昭和52年4月
4. 「中・高校生に見る友情の心理学的構造」 青年  
心理 4. 金子書房
5. 「自閉症の遊戯療法」講座心理療法—遊戯療法—  
福村出版、印刷中

## 研究の課題と経過

梶田正巳

教育心理学教室へ着任して、はや2ヶ年が過ぎた。この間、多忙さにとりまぎれて、なかなか思うようには、研究についても、教育についても進まなかった。ここでは、その反省の意味もこめて、この年の経過をまとめてみる。

### 1. 学習型（様式）の研究について

学習型（様式）がどのように認知発達の規定を受けているのか——この課題に実証的資料を提出することが、ここ3～4年来の仕事の一つとなっている。筆者の学位論文を初め、昨年発表した逆転学習の実験的研究もこの課題との関連で行われたものであった。この一年、この主題との関りでいくつかの実験をしたが、その一部分を愛知教育大学中野靖彦助教授との共著で「対連合学習における学習型の研究」のタイトルの下に本年度紀要に執筆した。これは、前著の発達の視座から学習型（様式）に接近する方向とは異なり、成人を対象として、特定の学習型（様式）の出現を規定している諸要因を1～2の学習事態で究明しようと試みたものである。今回の成果は、いまだ十分満足のゆくものではないが、この課題を解明する手がかりが得られるのではないかと考えている。

### 2. 教授＝学習過程の研究について

この研究課題については、まだまだ暗中模索の域を出ない。昨年より、現場の先生方・卒業生、あるいは塩田芳久本学名誉教授・杉江助手らと共に、教育実践とレバントな関連をもつ教育心理学を旨として、関心のある者が相い寄り、学習＝指導研究会を始めた。この一年間

に、すでに十回もの会合を開き、教授＝学習過程の諸問題について、熱心に激論を交わした。深淵な問題もしいに明らかとなり、討論が核心にせまるにつれ、いわゆる classroom learning あるいは school learning の心理学的な理論や研究がまだまだとぼしく、かつ微力であることを痛感した。けれども、この無力感から現実を離れて抽象的、理論的研究のみに自己をとおこめることは不可能である。それをのり越える研究を推し進めなければならないと決意した次第である。それはさておき、1年間の研究会活動を通じて、若干のヒントを捉えつつあるといえる。その一つを本紀要にまとめた。これは、大学院生（博士課程）の鹿内信善君と共に考え、実践しつつある一連の研究の第1段階に当たる。ここでは「数計算の教授＝学習；課題分析を通して」としてまとめたが、彼の貢献するところが大である。現在、次の研究として、この分析結果を活用して、小学校1～2年生の数計算の教授＝学習過程を明らかにすべく、反応分析を進めつつある。なお、その他のものについては、まだ研究資料をまとめるところまで至っていない。

### 3. その他の事項について

上記の研究の他にも若干の研究を行った。それを下にまとめて記す。

1. 「青年期の諸理論；発達心理的接近」  
久世敏雄編「シリーズ 現代心理学 4. 青年の心理」 福村出版 昭和52年5月

2. 「認知発達」

久世敏雄・小嶋秀夫編 「シリーズ現代心理学  
3. 幼児・児童の心理」 福村出版  
昭和51年11月

3. 「知能と知能テスト」

愛知県勤労会館ニュース「つるまい, 72」  
昭和51年12月

## 研究経過報告

田 畑 治

本学部に着任して、1年を経過した。ここでは、主として前年度に報告してきた研究課題の柱に即して報告する。

1. 主要な研究テーマ「心理治療関係による人格適応過程の研究」に位置づけられるものとして、以下の研究がまとめられた。

「一不安神経症青年の心理治療過程と治療的人格変化」  
教育心理学紀要 23巻 昭和51年10月  
「成人女性のカウンセリングの方法論的検討 (I)  
一問題の所在と事例的探索一」  
日本心理学会第40回大会発表論文集  
昭和51年9月

これらのテーマ領域に関連して、日本心理学会第40回大会シンポジウム『パーソナリティ形成の諸問題』において、「心理臨床の視点から」と題して、話題提供をする機会を得ることができた(昭和51年9月)。また東海相談学会第9回総会シンポジウム『私のカウンセリング体験』において、「不思議な夢をみる一女性とのカウンセリング体験」と題して、これまた話題提供をする機会を得た(昭和52年3月)。

なお上述のテーマの自己完結をはかるために、昭和52年度文部省科学研究費による出版助成を受ける申請をした。内容は、筆者が過去10数年にわたって取り組んできた「治療関係の体験目録」と治療関係の展開との関連を究明するものである。(今年度中に刊行される予定)

このテーマに関しては、今後、インテンシヴな事例研究ないしは症例研究へと発展させたい意向である。

2. 広く教育臨床にかかわるテーマに関しては、まだ具体的なテーマに掘り下げていない。教育体験の形成過程への関心は、ずっと持ち続けていきたいと念じている。それに教師の社会的地位や役割が見直されている今日、その資質向上に内的体験の深化が目指されることは不可欠であるとの認識は失ってはいけないと考えている。

3. グループ・アプローチの実践研究。前年(昭和51年)においても、学外の実践グループにいくつか参加した。学生相談教官自らが体験する“エンカウンター・グ

ループ” (九州・九重山) に初参加した。実践者自らがグループを体験することの意義は、とかく等閑視されがちである。しかし、初参加しての体験で、次回はより自らに挑まなくては、との意を強くした。その他、エンカウンター・グループにファシリテーター(促進者)として参加したが、研究成果としてまとめられる前に、グループそのものをどうとらえ、どのように展開していくかをよく観察し、そして思考していくことが先決であると考えられる。

カウンセリング研究会でも、かかるグループとしての側面をもっている。グループ合宿も2回ばかりもった。相互理解の深めの難しさを身をもって体験してきている。共同研究への動きは、徐々にできつつあるが、研究オリエンテーション、カウンセリング体験深化のオリエンテーション、さらに初任者研修オリエンテーションが入りまじり、実際の運営にかなりの混乱が生じたりしている。

4. 臨床青年心理学への接近。これは新しくここ1年取り組みはじめた研究グループである。青年心理への臨床的接近を旗印に、臨床心理相談室の有志で、比較的クロードな会を、隔週にもってきた。今年は、われわれの視点を明確にし、方法論的検討を加えてきている。いずれ、世に問うべく成果をまとめたいと努力している。

5. その他の活動等について

「植田論文に対するコメント」

臨床心理事例研究(京大教育学部心理教育相談室紀要) 第3号 昭和51年4月

「面接法」

伊藤隆二・松原達哉(編)『心理テスト入門—基礎知識と技術習得のために—』 日本文化科学社  
昭和51年8月

「生徒指導」

大橋正夫編『教育心理学』福村出版 昭和51年10月  
「行動の個人差」

津留 宏・小嶋秀夫(編)『概説心理学』有斐閣  
昭和51年11月